

Journal des dames et des modes. 1912—1914.

Paris, Aux bureaux du Journal des dame. (文献番号 8—62)

Hiler p. 486 Colas 1567

ジュルナル・デ・ダーム・エ・デ・モード、1912年から1914年まで

20世紀当初のパリに、大変ユニークな二種類のモード雑誌が現れた。一つは、一般にもよく知られた「ガゼット・デュ・ボン・トン」(Gazette du Bon Ton) (文献番号 8—57) であり、他の一つは、この「ジュルナル・デ・ダーム・エ・デ・モード」である。「ガゼット・デュ・ボン・トン」については、すでにイタリアの G.ヴェロネージ女史による「アール・デコ、〈1925年様式〉の勝利と没落」(文献番号12—185)(伊・仏・英版があり、我が国では西澤信彌・河村正夫共訳) に詳しく紹介済みであるところから、ここでは取り上げないこととし、代わって「ジュルナル・デ・ダーム・エ・デ・モード」について解題することにした。

もともと、この誌名は、フランス革命によって罷免となった修道院長のピエール・ド・ラ・メザンジュール(Pierre de La Mesangère)がクレマン夫人と共に1797年から1839年まで刊行した同名のモード雑誌を、その形式と共に踏襲したものであることは、本誌の第1分冊の冒頭に1797年ラ・メザンジュール刊の最初の図版が複製で掲げられていることでもわかる。

全5巻、79分冊から成るこのモード雑誌は1250部の限定出版で、オランダ紙に色刷りされた総数184枚の華麗なモード版画が収められている。いずれ劣らぬ独自の表現様式を特徴にした挿絵画家たちによって描かれていて、ヴェロネージ女史もいうように“今世紀当初におけるフランスの最も優雅な趣味的土台をきめる上で決定的役割を果たした”モード誌の重要な一翼を担うものであった。

参加した挿絵画家たちの中には、ジョルジュ・バルビエ(Georges Barbier)、シャルル・マルタン(Charles Martin)、ジョルジュ・ルパペ(Georges Lepape)、レオン・バクスト(Léon Bakst)といった「ガゼット・デュ・ボン・トン」でも活躍した画家たちの他に、ウンベルト・ブルネルスキ(Umberto Brunelleschi)、ブーテ・ド・モンベル(Boutet de Monvel)、アレクサンドル・ヴァレ(Alexandre Valée)といった、まだ多くの無名の作家たちが加わっている。

19世紀全般を通じて、ファッションの新型に関する情報を満たしてくれるのは、ほとんどがこうしたエングレービング・プレート(彫版図版)であったが、20世紀に入ると、アート紙に白黒のハーフトーンかまたは数色を加味した写真版の雑誌が現れて、印刷部数も急速に増大し、大衆化してそれがスタンダードになってくる。本誌にはこの様な時期にあつての美的覚醒を促がす熱い情念が込められていたことを否定することはできない。こうして本誌は、20世紀の最も“高雅な趣味の雑誌”の一つに数えられているのである。